



第63号

平成18年(2006)

4月26日発行

(年4回発行)

和の文芸

青木秀樹

聖徳太子が制定した十七条憲法の第一条は「和をもって貴しとなし」ではじまることはよく知られているが、その後に「さからうこと無きを宗とす。人、皆黨(たむら)あり」と続くことはあまり知られていない。世の中には色々な意見のグループ即ち「黨」(党とおなじ意味)があるという認識に立って、和の大切さを説いている。多様な意見の集合体である世の中では、自分の意見に固執して異なる意見や思想を排除するのではなく、色々な意見を習合させ、良いところを認め合ってゆく「和の精神」を太子は説いたと解される。猫養会において、明雅先生が「連衆心」の大切さを繰り返し説かれたのも、聖徳太子と同じ精神によることだと思われる。

文芸である連句では当然一人ひとりの個性が発揮されるべきものである。座の文芸とし

ての連句作品は「個性」のぶつかり合いと融合の記録ともいえる。連衆が金太郎飴のように同じ顔をしている筈はなく、同じことを考える筈もない。連句の座で他者の発想の意外性に驚くという経験はだれにでもあるだろう。個人のよいところを認め合ってゆくところに連句の面白さがある。連句はまさに和の精神なしには成立しえない文芸といえる。

自己主張を振りかざす「おれがおれが」ではやっていけないのはこの社会も連句も同じであろう。また集団生活が苦手な人がいる。そのような人は他者を受け入れる幅が狭く、自分の考えに固執することが多い。見え方が違うだけで、「おれがおれが」族と変わりが無い。いずれも連句に向かない人種といえる。独吟による連句作品が面白くないのは、本人が思い切った発想、思い切った転じをしている積りでも、個人の持つている知識・感覚の幅を超えられないところにある。以前、明雅先生が「連句の座で句が思い浮かばず、頭が真っ白になる」という人の質問に答えて、「独吟で百韻を五巻も巻けば自信がつく」と答えられたのは、あくまで発想の練習という意味であり、作品にはたいした価値はない。「連衆心」は連中がそろってひとつの作品を作り上げる気持ちであり、協同制作に力を合わせる心である。連衆一人ひとりが自分の長所を発揮し、かつ全体が融合することが望ましい。それを行うのがコンダクターとしての

捌手の役割である。また先輩が後輩の指導を行うのは、捌手の場合だけでなく同じ座にいればできることであるが、教える方も教わる方も連衆心をもって臨めば角が立たずに行えることであろう。

前句をよく理解して付け句を考案することのくり返しが連句実作であり、そこには「前句を立てる」という気配りが求められる。前句を凌ぐこと、前句より目立つことばかり考えるのは下品である。前句と合わせると前句が生き、名句になるような付けが本当の付け合いであろう。

現在作成中の『猫養作品集十六』に多くの会員から作品が寄せられたことは喜ばしいことである。今回はじめて作品を寄せられた方がかなり多く心強い。現代連句の復興のためには捌手の育成が急務であるとして、明雅先生が率先して捌手を養成してこられた伝統が今日生きていることが実感される。ただ、今回の編集に際して、多くの会員の方に、主に仮名遣いの間違い、初歩の式目違反などのケアレスマスの手直しをお願いした。間違いはだれにでもあるものでそれ自体恥ずべきことではないが、もう少し校合を丁寧に行っていたらと思う。また、自己満足の世界でなく他人の鑑賞に堪える作品にするためには、意味不明句、付け味不明の句を減らすように努めていただきたいというのが会員各位に対するお願いである。

初懐紙源心作品集

平成十八年一月十五日
於ホテルフロラシオン青山

「小正月」 内田 麻子 捌

小正月未だ雪積まぬ首都を行く

青信号の先に初富士

子供部屋ミニチュアの汽車走らせて

シフォンケーキを六つ切にする

夏の霜浴びて樹上に眠る猫

少しほころび揺れる忍冬

セーラー服つんと尖った胸まるく

イエスタデーをふたり聴く日々

百歳を卒寿の妻の介護する

荒ぶる神に魔物退散

ITの買収劇は不人気で

流行る歯科医は患者左右に

花万朶盃は藍色「とろり」注ぐ

きらめきながら遡る若鮎

ナオ音立てて煎餅割れば山笑ふ

鉄骨抜いたマンションの揺れ

ルオー描くキリスト像のしづかな眼

飛行機雲のゆつくりと伸び

湯婆を買ってくれたる彼女居て

ナンバーワンのホストイケメン

気にいらぬブランドバッグ質草に

するりと深く穴に入る蛇

麻子 常義 千恵子 景翠 美保 一枝 惠 保 枝 翠 惠 保 枝 翠 麻 義 義 枝 義

名月に托鉢僧の影を曳き

円高レートやや寒の頃

ナリじやんけんぼん何時まで続く人生は

声を競ひて揚雲雀鳴く

分枝にチョーク絵ありて花霞

石ころひとつのせるぶらんこ

連衆 生田日常義 鈴木千恵子 岩垂景翠

高瀬美保 西田一枝

久美子 碧

初御空小犬遊べる雲の形

ごぎようはこべら生ふる坂道

「初御空」

セレナーデ酒造の酵母育ちあて

筆太に書くけふの目標

舫はれる納涼の船月を待ち

香港シャツに抱き寄せられ

その昔喜び組にをりました

修正液で消してしまはう

酔を飲んで効果をめざすダイエツト

あげくのはては天下泰平

どこまでも鴉てんぐがついてきて

連続ドラマ視聴率上げ

友と賞つ平安神宮しだれ花

盃流し即吟の妙

副島久美子 捌

翠 惠 義 枝 保

ア 郁 碧 二 ア 碧 史 郁 子 史 忠 欣 二 碧

ナオ大きさは自由自在のシャボン玉

ドラッグストアバーゲンの旗

おらが村合併をして名が残り

六十年振り悩む豪雪

羚羊の挨拶にくる幼稚園

白いタイトの王子微笑む

裏切も愛も沈めて舞踏会

来世契りし人の爽やか

窓の月早よ来てみいと呼んではる

尾越の鴨の一つまた三つ

ナリ縄文の地図を頼りの旅半ば

手打ちうどんを門前の店

花トンネルゆつくりと押す車椅子

飛び交しつっ黄蝶白蝶

連衆 松本 碧 諏訪欣二 松島アズ

根津忠史 東 郁子

史 郁 史 碧 同 二 碧 同 ア 郁 史 郁 史

「小正月」

豊田 好敏 捌

礼服のひとまばらや小正月

好敏

淑気深々松籟の韻

真呂

バーコード書籍の隅に刷られるて

かりん

三和土の猫に届く宅配

壽子

夏場所に碧眼力士のぼり立ち

一恵

月も涼しく旅の計画

珠枝

初恋の彼に胸キュンクラス会

呂

名刺もらって役職を見る

惠

興信所ある建物のいかめしく

ん

波にあそぶる砂浜の缶

壽

邪気のと漏らす欠伸を聞きとめて

呂

残雪を踏み向かふ教室

ん

三つ四つと花にこぼるる鳥の影

壽

茶摘歌までロック調なり

枝

ナオ 東風吹けば峠のみせも早じまひ

同

きれいな星が徐々に汚れる

壽

地にひそみ屋根飛ぶ必殺仕事人

呂

モンテカルロで白鳥に逢ふ

ん

霜焼けの遺伝体質母ゆづり

同

あなた待ってね爪を外すわ

壽

藤十郎襲名披露で湧きかへり

枝

思はせぶりに秋の酒波む

惠

月さえてひと叢すすき詩仙堂

呂

あの坂この坂とんぼ流れる
ナリ 隊列をくみつつ下校の子供たち

壽 呂

覆面パトカー潜む公園

ん

満身で漕げばオールに花吹雪

敏

土手に座りて春雷を聞く

惠

連衆 木村真呂 登坂かりん 杉山壽子

山崎一恵 花巻珠枝

「傘寿の屠蘇」

倉本 路子 捌

稀有の世を生きて傘寿の屠蘇を酌む

路子

投扇興にあがる歓声

守男

ブリーダー庭の仔犬と戯れて

わこ

たれにも笑みをこぼしみる嬰

芙紗

いまだきの蚊帳珍らしと覗く月

弘子

寝乱れ髪は汗ばみし肌

澄子

後添は化粧映えして気立よく

守

女優稼業の殻を脱ぎたり

路

答弁も偽証六割建築士

わ

追ひかけっこのアシモ君めて

守

カプセルのサプリメントは膝に効き

わ

最肩力士はけふも黒星

弘

御馬寄せの丘の大樹の花ふぶき

紗

田舎暮しも慣れて耕す

澄

ナオ 小綬鶏の親子の列とすれ違ひ

紗

デジカメ選び迷ふ中年

弘

裏番組想定外の視聴率

澄

突出す雪庇久々の雨

紗

氷点下しつかと抱く肩細く

わ

火力・水力・越える迫力

守

かはいといふ語世界に広まりて

路

暗証番号一三四一（イザヨイ）の月

守

茫野は黄泉平坂夢のなか

わ

抽斗の奥隠す養虫

弘

ナウ 白秋は柳川育ち「叱られて」

澄

ショートケーキを鉄鉢に受く

守

花満つる単線の駅旅半ば

路

鮭五郎跳ぶ差潮の渦

紗

御馬寄せの丘 伊那にある丘陵

連衆 近藤守男 横山わこ 根津芙紗

松原弘子 八角澄子

「若人の」

篠原 達子 捌

若人の華やぐ街や初懐紙 達子
 ホテルのロビー飾る繭玉 和代
 フルートの途切れとぎれに聞こえて ゆみを
 妹たちは猫の取りっこ たつこ
 夕立の上がりて玉兔山の端に 華蔵
 急ぎの原稿汗拭ひつつ を
 逢ふ前に確かめて見る水鏡 蔵
 ハローワークで軽い面接 た
 エトランゼ公衆浴場お好みで 和
 駅へ近道禅寺の庭 蔵
 少年と飽くことのなきかくれんぼ を
 凡夫凡才昔麒麟児 た
 丸い口歌ふ土偶に花の散る 和
 山羊の毛を刈る丘の牧場 蔵
 ナオ 抜け参りお杉お玉の碑を過ぎて を
 下座のお囃子林家正蔵 和
 骨董店正面飾る大首絵 た
 わざつとらしく噓してみる を
 札束を滑り込ませる襟元へ 同
 カンパリソングやつて寝ませう 同
 どちらかと言えば着衣のマヤが好き 和
 色なき風に揺れる朽ち舟 同
 月を待つ友いくたりか胡坐くみ た
 を

秋場所番付うはさ交々

ナウ 始めから傾斜の急な城の道

杖をどうぞと張り紙がある

花の宴をわれ一差「熊野」を舞ひ

女手足りて厨うららか

連衆 長崎和代 青島ゆみを 竹内たつこ

山田華蔵

「モザイクの街」

鈴木美奈子 捌

モザイクに街華やぎて女正月 美奈子
 飾納めの干支の戌達 美奈子
 鑑定書見てくだされとおもむろに 美奈子
 醤油博士の愛用の皿 美奈子
 有明に土佐の立志の火と炎多て 美奈子
 涙浄らか浜の海亀 美奈子
 引きかへに声を失ふ人魚姫 美奈子
 うつぶすのみの髪は眠らず 美奈子
 鏡の間ウィーンフィルの切りもなし 美奈子
 あのチルドレン囲む寄鍋 美奈子
 賓客に出す酒くすねおっほっほ 美奈子

じゃんけんぼんはいつもグーなり

勘定は御名算にて花筵

神宮外苑春闘の旗

ナオ 下々の噂のせ来る雲雀東風

デカ長さんと同じふる里

葉指ちよつと曲がるが親ゆづり

警策さびし寒行の寺

牛若の笛嬭々と鞍馬山

四回転で君のふところ

見合して無いと思ひしフェロモンが

機織虫の憩ふ数珠玉

分け入りて月の薄野別の世に

霧になるらし堰の口より

ナウ 「たいくつ」とプリモプエルの呟きて

巨き蜂の巣アトリエの軒

見得切つてめ組の纏花の陣

三つ葉散らして作るおすまし

プリモプエル 「さびしいわ」とか「ラブ

ラブ」とか人語を話す人形

連衆 中田あかり 林 鐵男 久保田庸子

佐古英子 古賀幹子

「太箒や」

式田 恭子 捌

太箒や飲んででは返す朱き酒

少し若やく女正月

舷窓の海はゆらりと沖に出て

双眼鏡のあはず焦点

十六夜に人恋しさの町はづれ

まはり気にせず火祭りで抱き

遠州で育った奴と菊枕

粗品と申しこはい饅頭

相続税納得できぬまま払ひ

四捨五入とはいかぬ世の中

漁網には増殖したる水母のみ

ジャスミン茶注ぐ旅のラウンジ

指揮棒がテナーに振られ花しきり

蝌蚪の集まるやはらかき川

ナオ春泥に靴をとられる散歩道

壁画古墳を修復の技

英雄のES細胞夢と消え

仮面の下の顔のしげれる

氷りつくシカゴの街にマチネーを

久遠見つむるキスの激しさ

嘘つきのをんなが好きな黒真珠

猫はいつしか猫又となり

醉眼に涼しき月は三角に

樹

百年の魘魅のをどる花の宵

良

雅

戦艦大和の映画大入り

悠

同

兄弟マップサイトにまだ夢中

代

藍

ゲルに聞き入るホーミーの音

良

和

反芻を学習しない牛のゐて

恵

樹

離れられぬも物理現象

ウ

和

背な向けてくすぐつたいと笑ふ君

代

雅

鯨のような髭をたくはへ

良

樹

熱気たつ祭太鼓に玉兔ゆれ

ウ

和

公園デビューくづる幼子

美代子

同

ブーメラン超速球で投げられて

未悠

藍

勅題菓子の形をかしく

良子

雅

光琳水帯に流すも女正月

美恵

樹

ともかくよけた蠅螂の斧

悠

雅

天使ちよっぴりいたづらが好き

代

樹

陶の椅子浅く座れば花の風

悠

藍

田螺とるらし峡の村人

悠

和

清廉潔白ですと散る萩

悠

雅

満月に向かひバイクのギヤを替へ

悠

和

どんびしやの男理想の恋模様

同

雅

手取り足取り脈もとりつつ

良

鄭和

スノーシュー転がるコツをまづ教へ

悠

藍

火の用心のロボットができ

代

秀樹

もてあます多重人格我なれど

同

恭子

静謐を重ねて国を埋める花

恭

樹

インターネット一瞥もせず

藍

雅

風鈴売りを追うて路地裏

悠

ナウ

今昔職人気質変はりなし

樹

ナオ

ヒバリにはあまり似てない雲雀笛

悠

「光琳水」

山口 美恵 捌

ナウ骨壺のかきこそなにかつぶやいて

天使ちよっぴりいたづらが好き

陶の椅子浅く座れば花の風

田螺とるらし峡の村人

光琳水 琳派独得の装飾的な水の文様

ゲル モンゴル語 包(パオ)

ホーミー モンゴル独特の一人二重唱

スノーシュー 装備して雪の山野を歩く

スポーツ

連衆 本屋良子 棚町未悠 山田美代子

林ジョウ

悠

悠

悠

悠

悠

悠

悠

悠

悠

悠

悠

悠

悠

「雅かに」

高橋 豊美 捌

投扇興少年少女雅かに

御慶を申す犬のひと声

松林潮騒の音たかまりて

脇にかかへる新刊の本

夏の月受賞を祝ひ杯をあげ

化粧やや濃き恋のライバル

ほださるる愛の告白国訛り

雪が攫ひし海鳥の唄

中古車と古自転車満載し

縦に結びし前掛けの紐

包丁を持たば達人左利き

丸いおむすび坂をころころ

賑やかに長屋一同花筵

貧乏神を払ふ陽炎

オオドラえもん叶へてほしい春の夢

あつけらかんと起こすベンチャー

震度6うちの団地も崩れさう

浴衣の襟に風を送りつ

姐さんと藤十郎のこんちきち

梁つたふ大きい白蛇

合併で名前の消える父祖の郷

豊美

孝子

政志

有子

富美

孝

富

孝

有

有

富

有

豊

孝

有

富

志

孝

孝

豊

志

持って行きたい病床の月

晩秋の四肢を動かす微電流

棒高跳のバーの爽やか

ナリ 岩山を描く渴筆雄渾に

針供養してなめる黒飴

散る花も太鼓の音に舞ひをさめ

牛の尻尾にからむ姫蛇

連衆 坂本孝子 峯田政志 佐々木有子

村田富美

有

同

富

志

有

志

富

「注連の内」

大島 洋子 捌

加速度のまだつかぬ間や注連の内

御慶御慶と曲がる脇道

新着誌独ごきげんの爪を立て

掌にひとつつづつ飴をのせやる

半ズボン集まる月の紙芝居

村でおぼえたこの祭笛

ちよい不良(ワル)で器用な奴と墮ちていく

恋の後押し妖精の杖

窓を開け故郷の風を入れてみる

洋子

嬬

敬子

淳子

了齋

同

嬬

敬

淳

大関取ると四股二百回

うからやから揃ひ来爛を熱うせよ

いい人だったまだ若かった

花冷えに修復の鴟尾鮮らけく

鐘ながながと弥生野に聴く

糸繰れば天地をつなぐ奴唄

どこに居るのか北の御大

シベリアの等圧線の舌が伸び

蟪蛄枯れて土に落ちたる

寒声の山に真向ひ叫びをり

父のなき子をひっそりと産む

破鍋と綴蓋の逢ふ縄暖簾

アロエはどんな病にも効く

月渡る人も駱駝もオアシスへ

振り向けば西光る稲妻

ナリ 冬支度思ふばかりで後手後手に

のらりくらしと過ぎる老翁

漕ぎ出すノアの方舟花の波

そっと窺ふ鶏の抱卵

連衆 八代 嬬 須賀敬子 上月淳子

鈴木了齋

嬬

淳

齋

敬

嬬

齋

敬

淳

同

齋

嬬

敬

淳

同

齋

洋

齋

齋

「縁起達磨」

山本 要子 捌

元朝や縁起達磨に命入れ

笑ひ初めたり家族一同

公園に犬自慢する輪のできて

飛行船飛ぶビルの間を

笠かざし安居の僧の仰ぐ月

滝のしづきに恋の生まるる

びったりと肌も顔の眩しさよ

チャンプベルトは太くずつしり

故郷に錦をかざるチャンス来て

単線の駅埋める人波

少子化に歯止めかけた厚労省

パリパリと喰む薄生地のパザ

咲き満ちて花に倦みしは蛇一匹

井々春風の曲

ナオ 天空に絵風追はせて奴唄

ロードレースは三位以内に

さらさらとサハラ砂のこぼれ落つ

雪割燈の鈍く光れる

お七の血褒姒の裔か火事が好き

焼け棒杭にやけどする夫

道行きで演技賞得し大女優

月の光でナイフ閃く

どんぐりの殻より出でて自由なり

守 町 守 啓 町 昌 町 啓 昌 啓 昌 昌 守 町 昌 守 枝 昌 子 啓 子 千 町 要 子

案山子くらべに園児張り切る

ナリほろ酔いの爺と連れ立つ村境

桃色ペリカン夢見がちなる

筆簾の音取り流るる花の門

山の馳走は独活の和へ物

褒姒 周の幽王の寵妃

連衆 原田千町 小池啓子 中野昌子

山寺たつみ 谷本守枝

生かされて今年も生きむ初懐紙

孫八人と遊ぶ双六

ウオークラリー口笛合はせかろやかに

あるかなきかに風流れをり

蝸牛思案するかに月の下

浴衣の衿の抜き加減よし

振り返りしばしうっとり佇みて

帰って来ないレットバトラ

竹光の脇差に飛ぶ札の雨

草鞋履きたる托鉢の僧

近頃は狸囃子もロック調

行動半径五百メートル

ゆめうつつ花に浮かれて花を見ず

家も林も陽炎に燃え

ナオ 維納めざす特急列車ゆく日永

自爆テロしてはつとめざめる

嬪殿の重きおゐどに在る安堵

柳腰はや半世紀前

遺伝子は男で決まる染色体

富士のかたちで並ぶ夏雲

故知らず捨てし故郷目裏に

興にのり過ぎ猿酒に酔ふ

月揺るる突風なるや地震なるや

札拝堂にかづく冷やか

ナウ 銅像を終のしるべとなす首長

ゼンマイ時計僕のお宝

車椅子背にかかる花いとほしく

浜で分け合ふ菜飯弁当

連衆 横井士郎 青木泉子 遠藤央子

橘 文子

近頃は狸囃子もロック調

行動半径五百メートル

ゆめうつつ花に浮かれて花を見ず

家も林も陽炎に燃え

ナオ 維納めざす特急列車ゆく日永

自爆テロしてはつとめざめる

嬪殿の重きおゐどに在る安堵

柳腰はや半世紀前

遺伝子は男で決まる染色体

富士のかたちで並ぶ夏雲

故知らず捨てし故郷目裏に

興にのり過ぎ猿酒に酔ふ

月揺るる突風なるや地震なるや

札拝堂にかづく冷やか

ナウ 銅像を終のしるべとなす首長

ゼンマイ時計僕のお宝

車椅子背にかかる花いとほしく

浜で分け合ふ菜飯弁当

連衆 横井士郎 青木泉子 遠藤央子

橘 文子

士

泉

央

士

文

士

文

央

泉

央

文

央

士

泉

同

文

實

泉

實

泉

文

士

文

士

文

文

お祝いと忌 東 明雅

正式俳諧を興行する場合は、猫養で毎年四月に行っている亀戸天神藤祭の行事と、十月に行っている芭蕉忌の場合とを比較すれば、その違いが歴然でしょう。たとえば、懐紙もお祝いのときは紅白の水引だし、仏事は青白です。お祝いの時の端作りは「俳諧之連歌」ですが、仏事は之の字を除いて「俳諧連歌」と書きます。

正式俳諧ほど改まったものでなくても、亡き人の忌日に皆が集まって、追善興行をする場合があります。そのような場合には発句には故人の句を用いて、脇起りの一卷を作るのが普通ですが、そうでない場合も、あまり俗にくだけた発句ではなく、長高い不易の句を発句にすることが求められます。

追善俳諧の心得については「連句辞典」に記載があるように、「迷う」・「暗い」・「落ちる」・「罪」・「科」・「もゆる」・「苦しむ」などの字を用いることが禁ぜられ、「すが、これはみな亡き人の冥福を祈り、成仏を願う心の表現に外なりません。また「鬼」・「幽霊」などの妖怪の類、そして、「犬」などの畜生の類も嫌われますが、これは仏教の輪廻の思想の表われでありましょう。

もちろん、これは一種の迷信でしょうが、その外に、連句（俳諧）の祖が、例の歌垣（

嬬歌・男女が歌を詠みかわす行事）にあるとされ、言語には靈妙な働きがあるという言葉の信仰が、今日まで残っておりますので、現代連句でも割合に忠実にこの禁忌が守られております。

同様に、新築のお祝いの連句興行の場では「燃ゆる」・「焼ける」などの「火」の噴、航海・船中の興行では、「かえる」・「沈む」・「波」・「風」などの語を出してはならぬという慣習も、古くから残っております。

「醒睡笑」という江戸時代初期の笑話本には、当時流行した連歌や俳諧に関する話が多く載せられておりますが、その中に、

ある移徙（転居）の連歌の席で、

春の日は軒端につきてまはるらん

という句を出したので、宗匠は、日は火に通じて不吉だから「消せ」と命ずる。執筆が「数度の直しで、これ以上は消されぬ」というと、この作者「とにかく消しなさい。またすぐつけるから」と、付け火にも通ずる失言を犯してしまった、とありますが、この話をみても、このような禁忌のことが一般によく知られていたことが分かります。

「その他五体不具の噴、一座に差合ふ事思ひめぐらすべし」（三冊子）とあるのは一般的な注意ですが、追善・祝賀などの折には、一層深い心懸けが必要です。

悼卯遊庵志げ子宗匠

湘南連句うらら会盛んなりし頃、明雅先生は、蒲原志げ子さんのことを、「幡随院長兵衛だね」と評されましたが、正に親分肌の仕切り上手で、うらら会では熱心に連句の新人を育て、猫養会にも貢献されたのでした。

志げ子さん独特の酒脱な句が、一卷に見られなくなつて一年余、十七年十二月彼岸の人となられました。謹んでご冥福をお祈り致します。

「別れかな」

松本 碧 捌

受話器より木枯を聞く別れかな

松本 碧

白檀の香の冴ゆる香台

鈴木千恵子

国宝展列延々と続きゐて

青木秀樹

池の雀を追ひかける児ら

東 郁子

朝ぼらけ納屋をかすめる月淡く

高山鄭和

初めて鳴らすヒヨンの実の笛

郁 樹

今年酒まづ神棚に供へたり

郁 樹

姫宮様の簡素ウエディング

千 和

おっとりと言ひ合ひをする新世帯

千 和

来ない返信ひたすらに待つ

和 千

山羊さんが好んで食べる中性紙

千 樹

ヨーデル響くアルプスの峯

樹 同

一人旅夏の月見る氷河湖に

同 郁

こんな処にごきぶりがゐる

郁 同

「ねこみの通信」第七号より転載

建築士崩れるビルを設計し

地震の傷跡消えぬ住民

薄墨の花の命の蘇り

殿さま蛙泳ぐ古沼

ナオ 春惜しむ写経の人のなごやかに

身体の芯を揺する和太鼓

能登の浜赤銅の肌巻く晒

大漁旗を立てて入り船

外交史日記に記す万次郎

通訳抜きで愛を囁く

キムチ切るその小さき手を握りしめ

はかなき恋の遊女雪沓

源氏絵の末摘花も幸せに

近江商人いまだのさばる

手習ひの文房四宝月の窓

座敷童子も混ざる夜相撲

ナオ きりたんぼ鍋で故郷のクラス会

鈍色の空海に溶けこむ

山を辞す僧足早に闇に消え

老いの検診何事もなく

御点前の人型ロボに花吹雪

逃水遙かつづくこの道

平成十七年十二月四日首尾
於深川芭蕉記念館

「影冴ゆる」

膝送り

須田智恵さん追悼

内田 麻子

やはらかに和服着こなす影冴ゆる 本田弥生

冬至の梅の香りふくよか 橋 文子

水墨の筆を一気に走らせて 吉藤一郎

誰が歌ふか朗々の声 生

果てしなき草原照らす月今宵 文

秋澄む包に娘子訪ねる 郎

爽やかな彼の好みのルージュヒキ 生

電車の座席メール打つ人 文

のら猫ののそりのそりと睨みつつ 郎

八幡境内鳩に餌をやる 生

ナオ 宰相は党勢拡大笠にきて 文

冷やをかざして月に乾杯 郎

はからずも初蟬を聞く高尾山 生

胸に育む夢のプリンス 文

ヴィーナスの如き媚態に目がくらみ 郎

想定外の株の値上り 生

ナリ 御連泊大名宿は島一番 文

乗込鯛の膳に満悦 生

箒手にただ見惚れる花吹雪 郎

白玉楼に舞ふは佐保姫 執筆

長く猫蓑の仲間であり、梶ヶ谷房連庵の連

衆でもあられた須田智恵さんの調子を崩され

て、連句のお休みをさみしく思つて居りまし

たが、平成十七年八月三日（八十歳）心筋梗

塞のため永眠されたと伺い、知らずに過ごし

た日々を悔やみ、房連庵にて追悼半歌仙を巻

きました。ご一緒した折々のことどもの思い

出と共に、連句の友のご冥福を祈るばかりで

す。

「天にもありや」

内田麻子 捌

初懐紙天にもありや君も座し 内田麻子

面影胸に酌む年の酒 高瀬美保

連弾の姉妹の指の揃ひみて 松本 碧

見守ることく大人しき猫 市野沢弘子

砂浜に仰向きてみる月涼し 上月淳子

玫瑰摘みてかざる帽子に 麻

公園のマリオネットに群るる子等 保

インターホン鳴り誰か来るらし 碧

口紅をそつと直すも愛らしく 弘

寝床の隅に侏儒をひそませ 淳

ゆらゆらと偽装マンション震災忌 麻

赤い実を付けななかまど立つ 保

余生とは掬む掌を透かす水の月 五味蓉子

おみくじ引けば大吉と出る 淳

自画像を個展のメインと並べられ 弘

みな拍手する山は笑へど 八角澄子
刻止めて衣桁に残る花衣 橘 文子
泡吹く浅蜷ひそと厨に 澄

平成十八年一月二十六日首尾

鳥澤和代さん追悼 内田 麻子

朝日カルチャーの連句教室の昭和五十七年、五十八年頃の若手会員で、当時は歌川和代さん、松声閣のお庭で明雅先生と一緒のスナップも残って居ります。その後、嵯峨康隆先生の「くの一連句会」で活躍され、またいつかは一座してと、賀状の交換をして居りましたが、平成十七年八月十五日癌の転移で五十九年の生涯を閉じられた由、彼女を知るメンバーと房連庵にて追悼二十韻を巻きました。私、連句人としては、このような時間の中に、連句に情熱を燃やした連衆の思いを慰め度いと思えます。

「星冴ゆる」 内田 麻子 捌

おもかげの若き瞳や星冴ゆる 内田麻子
声のかそけく渡りくる鶴 市野沢弘子
墨香る文幅の書の床の間に 橘 文子
洋風懐石お目当てのシェフ 高瀬美保
杵型の団子作らん月今宵 上月淳子
三十路の娘彼と茸狩 麻

うそ寒の肌を合せて愛の火を 弘
頭を深々と祈る聖堂 文
横町の八百屋の猫はジョセフイース 保
トランプ遊びあきぬ幼児 淳

ナオ青時雨大統領に旗を振り

細き月影ゆれる五月田 弘

ドキュメントの映画監督気難し 文

成長途上楚々と美少女 保

他愛無く悪の男にひっかかり 淳

億の契約艶聞の飛ぶ 麻

ナリ全面が海の別荘をあげ

父方母方届く初難 弘

奥滋賀の観音菩薩花の笑み 文

ちりめんじゃこを入れるお握り 保

平成十七年十一月二十四日首尾

田村満子さん追悼 淳

未完の歌仙「ひと筋の道」 本屋 良子

励まされひと筋の道月明り 田村満子

あしたの風へ揺るる浜菊 本屋良子

マルメロの瓶の熟成楽しみに 加藤亀女

嬰あやすときみんないい顔 満

広告の紙飛行機を飛ばしあて 良

美しき小川にやごの棲みつき 亀

ナウ山霧は戸隠山を包みゆく

鬼を探せと村の若者 良

青春の門に未知なる夢を追ひ

遍歴の末やと見えぬ 満

マグダラのマリアのごとく接吻す 良
月光一枚冬風の海 亀

平成十七年九月十八日起首

この未完の巻は故田村満子さんがあと半年の命と医者に言い渡され、生きる気力を失っている頃、何とか気力を取り戻してほしいと始めた歌仙である。もうすっかり生きることをあきらめていた彼女に「亀女さんと三吟しましょう。もしその気があるなら発句を送って」と所望したところ、あくる日この発句が送られてきた。「半歌仙ぐらいは大丈夫だと思っわ」との電話だったが、病気は凄いと、リードで彼女を蝕み十二句で終わりとなってしまった。発句に読まれた夜は美しい十六夜だったので、月の句にしたとのこと。

何度かホスピスを訪ねたが、一度も彼女の愚痴を聞いたことはなかった。死を含めてすべてを受け入れている彼女の生きる姿勢には何か崇高なものを感じさせるものがあった。彼女の信仰の技かなとも思った。

彼女は故蒲原志げ子さんとは無二の親友で、志げ子さんの後を追うように逝ってしまった（十八年一月二日）のも何かの縁と思っている。

ホスピスのパテオに冬陽降りやまず 亀女
讚美歌や窓に大きな雪の富士
燃え尽す命や冬のピラカンサ

国民文化祭 やまぐち2006へのお誘い

やまぐち連句会事務局 中本七水

ねこみの通信の前号(第62号)で、青木秀樹さんから今年の山口県の国文祭概要をお知らせ頂き、当会会長からは西の京山口県の文化や歴史を含めて紹介させて頂きました。事務局からは具体的なところをこの紙面をお借りしてお知らせ致しますので、是非にお越し下さいませ。

会場は、通例だと駅付近のホテル等となるところですが、今年はお山の上の「山口県ふれあいパーク」という宿泊施設も完備されたモダンな研修センターで行います。広大な敷地と研修センター全棟、そしてひと山貸切りの大連句大会となります。新幹線の停まる新岩国駅に集合して頂き、そこから錦帯橋、吉川公の居城、由宇の浜辺等の吟行を兼ねながらバスで会場の玄閑まで御案内致します(当日の詳細は追ってパンフレットで御案内します)。

建物やお山から瀬戸内海の眺望は「募吟パンフ」の表紙のごとく、まさに「瀬戸の松島」と称されるように絶景です。あとでわかったのですが、この山からの景色は、人気女優・竹内結子登場のJ・R西日本のポスターにも使われております。

先日、会場打ち合わせを兼ねて一泊したのですが、お部屋の居心地はもとより、朝の海からの日の出の素晴らしかったこと、一生の思い出になること間違い無しのロケーションです。また、温泉ではありませんが地下八メートルから上げているフレッシユな地下水は、まるで鉱泉を沸かしているような肌触りでした。朝は窓を開けると新鮮な空気に小鳥のさえずり等々、大自然と海の幸は受け合いです。

由宇の人々も温かい人達でいっぱいです。会場をここに決めてから、由宇町教育委員会、文化協会のご協力を頂く為に由宇町(人口約一万人)に通り続けました。最初、教育委員会の人に「連句って、ほんとうにマイナーな人ですね。由宇広報に連句のことを連載したけれど一件も問い合わせがありません。こんなこと初めてです」と言われた時は、正直どうなるかと思いましたが、でも、今では由宇町でも連句会ができ、当日のボランティアも率先して呼びかけて下さり、当日の前夜祭の出し物も由宇の人たちの手で披露して下さいましたことになりました。まさに鎖が一つずつ繋がっていつている感じです。

今年の会場はお山の中ですから近くにコンビニもファミレスも居酒屋チェーンもありません。不便なこともあるでしょうが、芭蕉の時代の不便さからするとその比ではありません。便利すぎる生活で失われたものを、もし

かして芭蕉さんが教えて下さるかもしれません。皆様の力量で不便を転じる遊びにも挑戦してみてください。

今回は会場のご紹介でしたが、すべて丸ごと貸し切りですので、連句大会当日の企画も熟練者、初心者共に満足できる場を提供したいと思っています。何卒よろしくお願い申し上げます。

作品集について

鈴木千恵子

「猫養作品集の編集をやってくれませんか」と青木会長からお話があったのは、いつのことだったでしょうか。

追悼集『安曇野は昏れて紫』に書かせていただいたように、明雅先生への恩返しに私でできることだったなら力になりたいという猫養会に対する思いは変わりません。ただし、現役の社会人なので(というのには人生の先輩方に対して言い訳じみていますが)自由に使える時間を見つけ出すのが難しいのです。その思いで『昏れて紫』の校正などもお手伝いしたのです。そして作品集も編集の時期に校正くらいならばと思い、お引き受けしましたところ、編集というのには、「編集担当」だったではありませんか。こちらが能天気だったのか会長が老練だったのか、もはや分からないのですが、いつの間にか引き返せない道に足を踏み入れていました。正直に言って

事務局便り

作品集はそれまでお手伝いしたこともなく、自分が担当できるか不安でした。が、前任の梅田利子氏が丁寧な引継ぎをしてくださると同時に、今までの皆様のご苦勞が分かったような気がして、私も・・と思ったのです。編集の実際は不慣れなこともあり、やはり苦勞がなかったと言えは嘘になりますが・・東郁子奥様、会長、副会長、理事の方々に協力いただき、なんとか終えることができました。

私が最後まで悩んだのは、促音の問題です。猫養会式目では仮名遣は「歴史的仮名遣・現代仮名遣どちらでもよいが、その混用を嫌う」とあります。では、歴史的仮名遣を用いた場合「べつたら市」は「べつたら市」と表記するのが正しいのではないのでしょうか。ご存命の頃、その旨をお尋ねしたことがありました。が明雅先生は「まあまあ」とおっしゃったのでした。今回編集に携わって、その問題を考えました。俳句の世界では「ひよんの笛」は「ひよんの笛」、「ミルクテイー」は「ミルクテイー」と表記するようなのです。では、一巻の中に平仮名とカタカナの混在する連句では？ 世態人情諷交詩として、豊富に取り入れられるカタカナ表記の新しく珍しい題材のことを考えると、促音・拗音などは小さい表記で統一するという従来の方法を一見識だと思っただ次第です。

◇猫養同人会

日 平成十八年六月十八日(日曜日)
時 十一時より十七時(受付十時半より)
場所 新宿ワシントンホテル
新宿区西新宿三二二一九
電話 03-33343-3111

総会終了後 歌仙興行

◇猫養会総会

日 平成十八年七月十九日(水曜日)
時 十一時より十七時(受付十時半より)
場所 江東区芭蕉記念館
江東区常盤一六三
電話 03-3631-1448

総会終了後 歌仙興行

◇猫養基金にご協力有難うございました。

武村利子様 一万円
山寺たつみ様 五千元
天の川連句会様 一万円
諏訪欣二様 三千元
基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店
猫養発展基金 普通3376045

◇会費納入のお願い

猫養会の平成十八年度年会費納入をお願い致します。
四月と七月の例会時に受付で申し受けます例会に出席できない方は左記口座にお振り込み下さい。
猫養会 みずほ銀行新宿新都心支店
普通 3376088

◇訂正とお詫び

前号十一頁の「忽にしかな」の記事中誤りがありました。お詫びして訂正致します。

正 三浦正雄 建立 杉山壽子 献句
杉山壽子 献句 三浦正雄 建立
大倉大雄 書 大蔵大雄 書
総持寺 総持持寺

季刊 『猫養通信』第六十三号
発行人 猫養会 青木秀樹
〒182-0003
東京都調布市若葉町
二二二-116
猫養通信編集部